

2024年1月1日(月) 新年礼拝

2024年 北九州シオン教会標語聖句

望みを抱いて喜び、艱難に耐え、
絶えず祈りに励みなさい

新年礼拝プログラム

司会・メッセージ；退任牧師・力丸嗣夫

- * 奏 楽 力丸勝子
- * 信仰告白 使徒信条
- * 賛 美 “輝く日を仰ぐ時” 新聖歌 21番
- * 新たな献身の祈り 各自・自由祈禱
- * 最初の献身の時 “新しき地に” 新聖歌 398番
- * 聖書テキスト 唱和 詩篇150篇
- * メッセージ “神をほめたたえよ！！”
- * 祈 り
- * 頌 栄
- * 祝福の祈り 後 奏

顕すことを求められたのです。アダムとエバ、そして子供たちは、そこに一つとなって集い、神をほめたたえ感謝し、礼拝を捧げたのです。

- * 神の選びの地カナンから、エジプトでの奴隷の400年を経て、再びカナンの地に帰ってイスラエルは、エルサレムを神の都として整え、今日に至るまで、礼拝を捧げてきたのです。
- * 今私たちは、ユダヤの民に与えられたメシヤであるイエス・キリストによって、全世界の人々に与えられた、罪の赦しの“贖い”の十字架の赦しにより、《神の民》とされた今、神を礼拝する民に迎え入れられたのです。礼拝は、神の民とされた特権です。礼拝することによって救われるのではないのです。救われたから礼拝するのです。
- * 新約聖書のイエス様の教えでも、弟子たちの導きでも、私たち神の民とされた者の特権は次のようです。
 - ①一つにされること。週の初めの日の主の甦りに合わせて、やがて再び来られる主を待ち望む信仰をつないで、神の前に礼拝を捧げる
 - ②礼拝は、まず、神をほめたたえることなのです。
 - ③神の言葉を聞くことです。⇒言葉(メッセージ)で・魂・霊で…
 - ④常に献身することです。
 - ⑤集まった一人一人が心一つにすることです。神を真ん中にいていただいて、交わり喜び合い、赦しあい、慰めあって神によって一つに結びあって、世に遣わされるのです。礼拝は派遣の場ともなるのです。

ここは主の宮です

主の臨在のあるところでは

神をほめたたえよ

『神をほめたたえよ』

2024年(令和6年)1月1日新年礼拝

詩篇150篇

- 1節: ハレルヤ。
神の聖所で神をほめたたえよ。
御力の大空で、神をほめたたえよ。
- 2節: その大能のみわざのゆえに、神をほめたたえよ。
そのすぐれた偉大さのゆえに、神をほめたたえよ。
- 3節: 角笛を吹き鳴らして、神をほめたたえよ。
十弦の琴と豎琴とをかなでて、神をほめたたえよ。
- 4節: タンバリンと踊りをもって、神をほめたたえよ。
緒琴と笛とで、神をほめたたえよ。
- 5節: 音の高いシンバルで、神をほめたたえよ。
鳴り響くシンバルで、神をほめたたえよ。
- 6節: 息のあるものはみな、神をほめたたえよ。

ハレルヤ

今日から、救い主の御降誕を記念した、御降誕歴2024年が始まります。こうして、毎年のことですが、その年が始まるたびに、今、私がここにいると言うことが不思議でなりません。幾たびもお話してきましたが、1955年3月8日(火曜)この日が私の人生の再生の日なのです。中学3年卒業一週間前でした。この日を期して、わたしの人生は新しくなり、69年という長くも短い人生を、ひた走りに走ってきました。

そのころ、関門海峡に、橋が架かるなんて想像もできませんでした。21世紀と言う、百年ごとに迎える区切りの新世紀が来るなど、考えも及びませんでした。父母が生まれたのも、20世紀でしたから。

私たちはこれまで、どれほど主の恵みに包まれたことでしょう。

今年どの様なビジョンをもって新年を迎えておられるでしょうか。

主に感謝と新たな献身を捧げましょう。

今日新たに、主を礼拝していますが、私たちの礼拝は、何をもって礼拝と言うのでしょうか。ともすると、毎週行っているように、プログラムに従って進行する、

* 信仰告白⇒祈り⇒賛美⇒聖書朗読⇒献金(献身の時)⇒

..説教(メッセージ)..⇒献身の祈り⇒頌栄

教会・教派によって少しずつ異なるでしょうが、ほぼこの様な要素を含んだ形に定型化されたプログラムに沿って、進行されています。

この形を崩しては、礼拝にならないのでしょうか。私もそうでしたが、プログラムの変更によって、礼拝の姿が損なわれるような思いを持ったこともありました。もちろん、教会が、世の中に迎合して、もっと楽しい、外部の人が、参加しやすい形を変えたものを求めて、様々な試みをした、20世紀の教会もありました。それによって教会は、溢れるほどの人で、満たされたものもありました。しかし、そのような教会が、内部分裂や、牧師の継承によって、そのような指導性や、管理(経営)能力が常に、維持することが出来なかったために、縮小したり、消滅したりしました。

また、そのような変革を試みたために、世俗の要素や雰囲気が入り混じり、楽しさや、躍動感や、新しい文化を求めるような礼拝に代わってきたところまで出てきました。そんな時に、百年に一度と言う、世界的パンデミック・即ち、コロナ禍が、クリスチャンの集まる教会をも直撃したのです。

或る教会は大きな間違いを犯しました。それは、神様が御支配になる教会が、コロナ感染の温床になることはない！我々は神の手に守られているのだから！何と傲慢な思いでしょう。私たちの教会は、理念(信仰)としては“神の国”なのです。しかしそれが現実化するのには、今の世界の中ではありません。

今一つ、このパンデミックによって、教会に変化がもたらされたのは、コンピューターの普及により、教会に集まらずに、礼拝を捧げると言う世界的混乱から起こったことへの解決の道をして、通信機器によるオンライン方式での、礼拝配信による礼拝でした。

ここで問題となるのは、この方式の礼拝は、世界的死の病のパンデミックから信徒を守るための武器となりましたが、今このパンデミックが終息した今、信徒の中には、体の悪い方やご高齢で教会に来られない方は別にして、なお流され続ける、オンライン方式の映像による礼拝で、教会に集うという伝統的教会の姿が、弱まってきていると言う事です。なぜ、…

日本人には信徒は教会に説教を聞きに行く…と言う、伝統的概念が、どこかぬぐい切れないところがあるからです。ですから、オンラインや、Uチューブによる礼拝を流している教会を検索して、良い説教を求める…と言う、形式が増えてきたからです。即ち、礼拝が説教を聞くこと…と、なってしまうのです。悲しいことです。

そこで、今日は新たに、私たちクリスチャンの生命線である、礼拝とは、一体何だろう？と、もう一度考える時をもって見たのです。

冒頭の詩篇150篇をもう一度読んでみましょう。わずか6節の短い詩の中に、11回も、《神をほめたたえよ》を、重ねていますね。

これこそ礼拝の本質なのです。《神をほめたたえる！》私たちはこのために一同に集まるのです。神の前に出る…と言う事は、人が創造された時から始まった、神との交わりの形だったのです。人は罪を犯したとき、神の来られるのを感じて、隠れた…と、創世記は記録しています。カインも神の前から離れていきました。

* 神は人々が御自身を忘れないようにと、神の臨在するしるしとしての神の住まいと言われる神殿を建てることを教え、そこを永遠の地上にある神の臨在のしるしとして、エルサレムを定められたのです。
* 今一つは、祭壇を築いて、犠牲の羊を捧げて、罪の贖いのしるしを